

Civiltà ⑨

し び の と

高松市美術館
ボランティア通信
2004年4月1日発行

誌 上 ギ ャ ラ リ ー ト ー ク

ピノッキオの世界展

～ その誕生から現代まで ～

会期 | 4月9日(金) ▶▶ 5月9日(日)

ピノッキオ生誕120周年にあたる2002年に公開された、ロベルト・ベニーニの「ピノッキオ」。ピノッキオをハイテンションの大人＝ベニーニが演じるという、はちゃめちゃんな映画でしたが、ピノッキオの物語はそうした大胆な解釈で料理しても壊れることのない、それ自体奇想天外で豊かな意味を内包した物語です。子供向けでありながらさまざまな風刺やイタリア・トスカーナ地方の文化が織り交ぜられている、大人の寓話でもあるのです。

ピノッキオの初版本や挿絵原画、ピノッキオが生まれた同時代に活躍した革新的なグループ・マッキア派の絵画、そしてイタリア現代美術の旗手、ミンモ・パラディーノのイラストなど、ぜひこの機会に、古今のアーティストたちによるピノッキオの表現をとおり、一筋縄ではいかないピノッキオの世界を堪能していただければと思います。

【高松市美術館学芸員 牧野裕二】



▲フランチェスコ・ジオリ《田園にて》
1894年頃 フィレンツェ、ピッティ宮殿
近代美術館蔵



▲ミンモ・パラディーノ《ピノッキオの冒険
のための挿絵原画》2003年
©Mimmo Paladino, 2004-2005



▲カルロ・キオストリ(カルロ・コッローディ)《ピノッキオの冒険》(1901年版)
挿絵原画) 1901年頃 イタリア、フィレンツェ、ジュンティ出版社、
歴史文書室蔵 ©Giunti Editore, Firenze, Italy



▲芹川英子《木彫目込人形「よきしらせ」》1989年

その衣装の鮮やかさは、私達をハッとさせます。風情ある作品を制作し続ける芹川さんは「私のやっていることは、日本の人形制作における歴史上の一点にすぎない。この技法を次に伝えていくことが私の役目」とおっしゃっています。

今回は、日本伝統工芸展五十年の節目として、日本工芸史に残る150人の代表作を紹介しています。次代に引き継がれていくべき、世界に誇る日本の伝統工芸をご鑑賞下さい。【福岡洋子】

日本伝統工芸展50年記念展

「わざの美」

会期 | 5月28日(金) ▶▶ 6月27日(日)

「よきしらせ」と題されたこの作品をご覧ください。彼女は良い知らせを聞いた喜びを噛み締めているのでしょうか。柔らかなボディの曲線、しっとりとした肌の質感、本当に生きているかの様なうっとりとした表情から乙女の嬉しさが私たちに伝わってきます。

作者の芹川英子(せりかわ えいこ)さんは粘土で作った原型をもとに人形を彫りだし、その上から貝殻の粉末に膠(にかわ)を溶かした胡粉(ごふん)を塗ります。幾層にも塗り重ね、そのつど刷毛(はけ)跡を残さぬよう丁寧に磨くという手法は、技術も根気も要る仕事ですが、胡粉は日本にしかない人形制作の技法です。

この技法が廃れてしまうのは勿体無いと、芹川さんは胡粉に顔料を加えた独自の手法「彩彫(さいちょう)」を編み出しました。何色にも重ねた胡粉を彫って、複雑な衣装の模様を表し、人形ひとつひとつの性格描写の手段とします。

コミミな
お話し

平成14年度から完全学校週5日制が始まりました。高松市美術館ではその以前からも土曜に小中学生の入場無料を実施しています。その利用者数は、平成13年度498人、平成14年度602人、平成15年度1553人…(特別展における利用者数/平成15年度は16年の3月末まで)と、少しずつ増えています。土曜日は、家族で美術館で過ごしてみたいかがでしょうか?【末原香里】

突撃 アートの晩ごはん

6

今回のテーマは、とうとうやって来ました！近頃全国的なブームを見せている、香川が誇る元祖ファーストフード！そう、喉ごしすっきりりの白い「あれ」です！

これまでこのコーナーのテーマ候補に何度も上がりながらもアートとの接点が見出せず、見送られてきたテーマ「うどん」。香川で活躍するアーティストとしては避けては通れまい！ということ、重い腰を上げてうどんとアートの接点を探したのですが、これがなかなか見つからない！でも、苦労のすえ、ネタを3つ見つけましたよ！

まずは、アーティスト・奈良美智さんが大のうどん好きであるというネタ。この号の「civiviが見た！」でもご紹介している人気アーティストの奈良さんがうどん好きとは、うどん王国の住人としてうれし限りです。ちなみに奈良さんの食事は、だいたい1日1回で、1ヶ月のうち12食がうどんだそうです。単純計算すると1ヶ月30食で考えて、全食事の40%がうどんという事に。香川県民もビックリです！また、最近はこのある硬い麺のほが食べ物として魅力があると思ふようになったそうです。女の子がうどんをすすっている作品が現れる日も近い！（1）

そして、あのダライラマもうどんに興味があるとのこと。オーストラリアの作家と面会したとき、「今一番望んでいることは？」と尋ねられて「日本のうどんを食べる事」と答えたのだそうです。「世界平和」ではなく「うどん」としても親近感がもてました。（2）

ところで、讃岐はじめてうどん屋が現れたのはいつ頃でしょう？金刀比羅宮所蔵の作品で狩野休庵清信という絵師が描いた《金毘羅祭礼図屏風》という六曲二双の屏風があります。そこには秋の大祭で賑わう参道の様子が生き生きと細密に描写されているのですが、その中には様々な店に混じって3軒のうどん屋が描かれているのです。いずれも当時のうどん屋の目印だった鳴子坂に切妻屋根をくっつけたスルメイカのような看板を軒先に下げています。

どの店も店主のオヤジさんたちが店頭でうどんを打っています。粉をこねている場面、



イラスト=牧野裕二

包丁切りをしている場面、麵棒で伸ばしている場面と、描写が細かくこの300年前の屏風絵がさきさきうんとんに関する最も古い資料になるそうです。（3）

イラストに描いた場面では、店の主人がうどんを伸ばし、のれんの奥からほうとんを食べ終ったと思しき人物が満足そうな顔で現れ、黒い着物の人物は「うどんでも食べていくか」とつぶやいているかのようです。「作る人」と「食べる人」が同じ空間でお互い楽しそうにやっている、この開放的な雰囲気は今の香川のうどん屋さんのそれと同じです。

香川のうどん屋さんが受け継いできたもの、それは「美味しさ」とこのフレンドリーな雰囲気なのだ、ということをごの300年前に描かれた屏風を見て確認できたような気がします。 [佐々木真理子 牧野裕二]

参考資料

- (1)雑誌記事「高松市美術館で絵を見せてもらったお礼に、奈良さんにさぬうどんを持っていったよ。」月刊T J KAGA WA 2003年8月号、p.70
- (2)「あいさ」に代えて「ART TODAY 2002 岡崎乾一郎展 カタログ」現代美術館2002年
- (3)新聞連載記事第35話「金毘羅祭礼図屏風」金刀比羅宮美の世界 四国新聞社2003年11月30日付21面

美術館日記

2003年11月29日 舟越桂展展示

職ネクタイの首なし人間！《水のソナタ》の組立てをしているところです。舟越作品は基本的に首と胴体に分かれていて、大きい作品は多くのパーツから成ります。展示作業中は身体パーツがぞこらじゅうに横たわっていてちよつとサディスティック！



2004年2月28日 アートで遊ぼう！

玉楮象谷展・鑑賞プログラムにて、外で象谷の銅像、生家を、展示室で作品を見た後、「あなただけの象谷さん」を各自自由に描いてもらいました。ポスターで作った旗を手に子供たちを見事にまどめ上げた川西学芸員をしてカリスマ漆舞具との呼び声も！その旗は道路を渡る際、交通整理に威力を発揮していました。



【高松市美術館学芸員 牧野裕二】

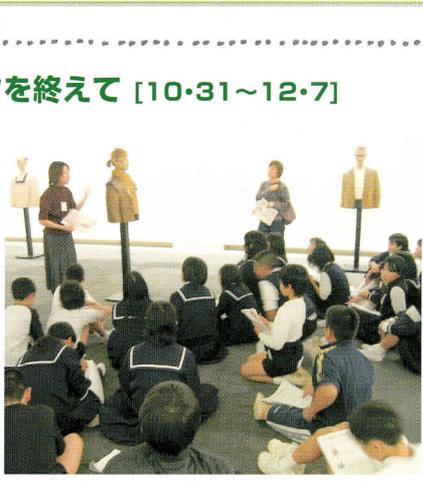
■ 舟越桂展～森から来たささやき ギャラリートークを終えて [10・31～12・7]

「これで2回目」「もう1回見に行く」「お母さんも行きたがっている！」友人からこのような言葉を聞き、舟越桂さんの人気に改めて驚かされました。私たちciviのギャラリートークも、毎回大勢の方が聞いてくださって緊張いっぱい、うれしさいっぱいでした。

ところで皆さんはお気に入りの人(作品)はありましたか？私は《教会とカフェ》という眼鏡をかけた男性像が気になって仕方ありませんでした。知り合いの中にこんな人がいそうな感じで！それから《水のソナタ》。ピアノを弾こうとしている全身像ですが、ピアノの影が像を支える

土台になっている面白い作品です。舟越さんはソリストの孤独を考えながら制作されたそうですが、作品の人物は自分を律しつつピアノに向かっているように見えます。さきほど、「弾こうとしている」と書きましたが、本当は「弾いているところ」かもしれないし、「弾き終わった」ところかもしれない。その見方はきっと人それぞれ。見る人によって感じ方が全く違うというのも舟越作品の面白いところ。

皆さんと一緒に作品を見るのを楽しんだり、語りあったりしたい。私たちciviの活動にこれからもおつきあいをお願いいたします。 [末原香里]



主な活動

- 2003年
 - 10・31～12・7 「舟越桂展」ギャラリートーク
 - 11・8 高知県立美術館 サポーターとの交流会
 - 12・27 漆芸ワークショップ／北岡省三(漆芸家)
- 2004年
 - 2・27～3・28 「玉楮象谷展」ギャラリートーク
 - 4・1 しびのーと9号発行

■ 漆芸ワークショップに参加して [12・27]



▲実演する北岡先生

年の瀬も押し迫った12月27日、香川県漆芸研究所で漆芸家・北岡省三先生に漆芸ワークショップの講師をしていただきました。課題は小さな堆漆板を

やすりで削ってペンダントトップを作るというので、予定時間をオーバーしたにもかかわらず、助手の方2名とともに丁寧に指導していただきました。

作業に取り掛かる前に先生がたが作られた見本を見せていただきましたが、それらはまるで宝石のように美しく、はたしてこれが作れるだろうか、と一同思案しながらのスタートとなりました。

堆漆は、朱、黒、黄、白、紫などの色漆を何層にも塗り重ねたもので、百回塗ってやっと3ミリの厚さになるという、それを作るだけでも大変なものです。本来は彫刻刀を使いますが、素人にはとても使い

こなせないで、目の粗いものから細かいものまで5種類の耐水ペーパー(やすり)を順にかけて、形を整え、光沢を出していきます。作業を進めると次第に鮮やかな色の層が現れますが、色の組み合わせは各自異なりますので、同じような形に彫っても、個々の作品がもつ表情は実に様々です。磨くほどに輝きを増していくグラデーションの美しさに感激し、思わず作業に没頭しました。

▲完成作品。チョコレートみたい？

ものを作ることの喜びを再認識するとともに、伝統芸術の奥深さに心酔し、



漆芸を身近に感じることできた1日でした。 [皆見礼子]

高松市美術館コレクション

奈良美智 《Milky Lake》

2001年 / アクリルリネン / 259.3 x 259.0 cm / 高松市美術館蔵

まあ、なんて頭でっかちな男の子? それとも女の子? これって二メのキャラクター? それにしても、なんて目してるのかしら。どこかで見たような...

作品を前に、「こんなみなさんの声が聞こえてきそうです」。

この作品は、2003年、高松市美術館コレクションになったばかりのニューフェイス奈良美智の《Milky Lake》です。作品のイメージと多岐から勝手にかわいらしい現代つ子の女性アーティストを想像していたのですが、奈良美智は、ナラ・ミチではなくナラ・ヨシトモが正しい読み方で、1959年生まれの現在44歳の男性アーティスト。海外でも評価が高く、今最も注目を集めているアーティストのひとりです。



©2001 Yoshitomo Nara. Photo: Yoshitaka Uchida, Nomadic Studio

この作品もそうですが、奈良の作品は親しみやすい子供をモチーフにして描いているにもかかわらず、単純な形にデフォルメされた目は、ある独特の鋭さ、したたかさ、疑い深さ、あるいは反抗心など、とても一言では言い表せない複雑な要素を含んだまなこを、私達に向かって投げかけてきます。

奈良は子供をモチーフにした作品を描く時、自分の幼い頃の記憶を思い出しながら、その頃言葉にできなかったことを作品に表現していると言っています。彼は次のような詩を書いています。

時々僕は子供のようだが
時々僕は本当に子供だ
時々僕は大人のようにだ
しかし本当の大人にはなれない

奈良美智
「深い深い水たまり」
角川書店より

ふたたび作品に目を向けてみる。「どうして、そんな目をしているの? なにを考えているの? ミルクの泉にどっぷりと浸った子供の目、実は私自身の中にあつたのかも知れない。」
【鈴木典子】

舟越桂展をふりかえってーワークショップと遠隔授業

「舟越桂展 森から来たささやき」(2003.10.31~12.7 高松市美術館にて開催。2004.4.4~5 広島市現代美術館にて巡回)の会期が終わりはや数ヶ月。思い出深い2つのイベントについて記しておきたいと思えます。



▲《森へ行く日》1984年 個人蔵 撮影:落合高仁

ワークショップ(11月1日)

「作品との対話/作者との対話」と題した中高生対象のワークショップでは、まず午前10時から11時まで展示室で作品を鑑賞し、ワークシートを作成してもらいました。ワークシートの内容は、まずこちらで選んだ3点の作品それぞれについて、自分なりのタイトルをつけ、連想したことを自由に書いてもらい、次にそれらの発展型として、4点の作品を1つの物語の登場人物ととらえ、それぞれどのような物語で、それぞれどのようなキャラなのかを考えてもらうというものです。

続いて午後1時から2時までは舟越さんに登場していただき、展示室で参加者の発表にコメントいただきました。エピソードも披露していただきました。参加した中高生の皆さんは、照れながらもじつと興味深いタイトルとストーリーを披露してくれました。そのやり取りの一部をご紹介します。(森へ行く日)(1984年)をめくってです。



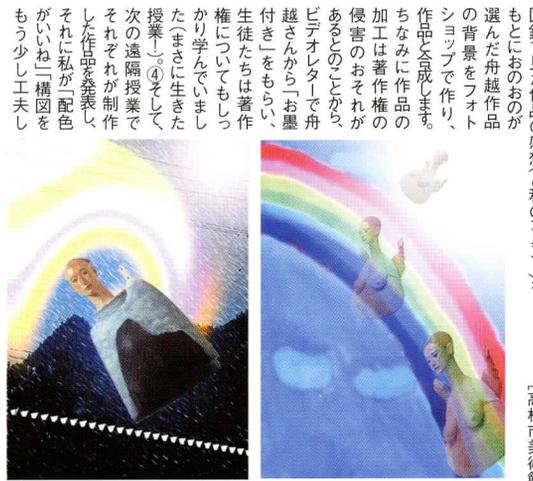
ワークショップでの舟越さん。《森へ行く日》を前にして。

参加者(以下参A)：私のつけたタイトルは《僕の家に電球がない》。夜電気がつけないでいるのって、困ったなとつぶやいてるのって、感じました。舟越氏(以下参B)：「おもしろいな、でも大体この人は不思議な感じに見えるのって、どうも変わった顔をしていて、おどから上か足りなさ過ぎ、なんかか蛇みたたいだね。《同突》急に決まったクルブ展を出すためにこれを作ったんだけど、勢いだけであっという間に作ってしまった。搬入の日には、わあーどうしようと思間ぐらいたら、制作過程の記憶がぜんぜんなくて、「オレ入って作ったんじゃないやないか?」そういう気がしてきて、だんだん好きになつていった作品です。我を忘れて突っ走ることで、何かが出てくる。《うって》経路、君たちにもいじりかと思えますよ。(筆者に向かって)これ触つてもいい? 急いで作つたので首がびつたりはまるようになって、いろいろ遊べるんですよ。(作品の首を見上げるような角度に変える)さっきまでの静かな感じとはずいぶん変わるでしょ! なんだか、Qも違つて見えるよね! (同爆笑)ところで、ほかの人、どんなタイトルを思いついた?」
参B：「楽しい迷い」。
参A：「あ、でもわかるね。ある意味迷いって可能性があるってことでもあるしね。僕も制作はよく迷いますよ。あなた?」
参C：「《歌う人》」。
舟：「面白いな。口は閉じてるのに歌って。ちょっと興味があるけど...」
参C：「毎日単語な生活を送つても自分の中に歌を持っているような感じがしたの、口を閉じてるのでも声には出さないけど、普段見ているものから歌を取り入れていくような感じがしました。」
舟：「あなたがそういう人なの? (参加者照れながら否定)ところで、タイトルのつ方のヒトをひとり言うことね、例えば寂しそうで疲れている人のことをそのまま言うんじゃなくて、僕は『寂しい』疲れている、という言葉から浮かんでくるものをつけるんです。たとえば『葉のぬるもの』とかね。(一同感心)」
このようなスタイルで1時間があつた間に過ぎ、次の講演会まで休憩がわすれかかれないかわからず、「タバコをすこし吸う時間さえあればいい」予定時間を越えてもお話を続けてくださいました。おかげでたいへん充実したワークショップとなりました。舟越さんのサービス精神に感謝!

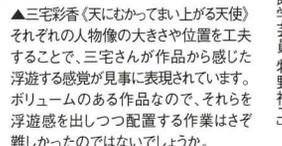
遠隔授業

10月27日/11月27日/全5回

香川県内にある詫間小学校の呼びかけに応じ、インターネット回線を用いたテレビ会議システムで生徒たちとやりとりをする「遠隔授業」を5回にわたって開催しました。まず1丁を駆使したそのハイテクが驚かされますが、単にテレビ電話で作品解説をするだけのものではなく、内容がかなり凝つていて、(企画・立案はほとんど詫間小の園子先生を中心とする先生方がされました)①まずは生徒が美術館に「展覧会を見に来た」、②次にその印象を遠隔授業で発表し、私がそれに意見を述べたり補足したりします。③そして生徒は実物と収録で見た作品の感想と私のコメントも選んだ舟越作品の背景をフोटンショップで作作り、作品を完成させます。ちなみに作品の加工は著作権の侵害のおそれがあるのをごまかしてビデオレターで舟越さんに「お墨付さ」をもらい、生徒たちは著作権についてもしっかり学んでいただき、たまに生きた授業。④そして次の遠隔授業でそれらが制作された授業録が「配色がいい!」構図をもう少し工夫し



▲松岡敬佑《いだい大神》
デジタルカメラで撮影した外の風景との合成。はじめ松岡君は写り込んでいる電線を消したがりましたが、私は電線があるほうが現実の中に突如、非現実が出現したみたいで面白、よとコメントし、残してもらいました。屋根の連なりが作るギザギザ模様アクセント!



▲三宅彩香《天にむかってい上がる天使》
それぞれの人物像の大きさや位置を工夫することで、三宅さんが作品から感じた浮遊する感覚が見事に表現されています。ボリュームのある作品なので、それらを浮遊感を出しつつ配置する作業はさぞ難しかったのではないのでしょうか。

「た」などと偉そう(一)なコメントをします。⑤そして他の生徒、先生、私の意見を参考に、修正を加え、⑥最後の遠隔授業で完成作を発表し終ったのです。スベレの都合がよ、完成作品は2点しか掲載できませんでしたが、どれもみな作品から受けた印象を巧みに視覚化することに成功して、驚くべき完成度に達しています。イメージをめぐりリアルタイムのやり取りというのは、授業におけるテレビ電話の非常に効果的な使用法だと思えます。またそれを反復して行うというコンセプトも授業内容を深めるものにするうえで効果的だったと思います。生徒もですが、仕掛け人の先生方もすげえ!

最後にひとこと。舟越さんの話を聞いていると「つながる」という言葉が頻発して登場することに気がつきました。ある経験が後の作品の造形へ「つながる」といったような話においてです。展覧会を思い返してみると、この「つながる」という関係はいたるところに存在して、たまたま思っています。作品どうしの「つながり」、作品と人の「つながり」、インターネット回線を使った「つながり」、「つながり」の「つながり」という感覚が舟越作品のキーワードのような気がするのですが、いかがでしょうか?
【高松市美術館学芸員 牧野裕二】

知ってっただけ、っ？

美術館 9

看視員と受付の巻前半

civiと一緒に美術館を探索してみませんか？
今回は、美術館の顔ともいえる看視員と受付の方々のお仕事をリポートしてきました。

高松市美術館では「ミュージアムスタッフ」とも呼ばれている看視員さん。まず、看視員さんって展示会の会場での椅子のお掛け、お客様を見ているのがお仕事？というややふやな認識で興味津々美術館1階の常設展示室までお話を伺いに行きました。

看視員とはどのようなお仕事なんですか？の質問に「私たちは展示作品の保護という責任があるので、お客様に美術館からの禁止事項等のご協力をお願いしています。例えば：「と、チケットの裏に書かれています。項目を見てください。」

フムフムこんなところに：なるほど：「作品に触らないで」「写真、模写、タバコ、飲食はダメ」はわかるけど、「傘の持込禁止」はどうしてか？って質問しようとして

▲受付

「お子様とはお手をつないでくださいね」と言われるのも、小さな子供は悪気がなくても、思わぬ行動をとることがあるので、気を付けてくださいね、という意味なのだそうです。

「以上のようなたくさんの方々の注意事項をお願いすることになるので、言葉使いには特に気を使います。見に来て下さったみなさまに楽しく鑑賞していただきたい、というのが私たちの一番の願いです。」「そして「看視員の仕事、とても楽しいよ」との明るい声に誘われ、私も看視員を体験して

「そうそうその通り」と小さく拍手してくれました。ですからヘルメットや大きなカバンなどもコインロッカーや受付に預けるようお願いするのだそう。また、メモをとるのに万年筆、ボールペンがダメで鉛筆が構われないのは、万が一作品に触れることがあっても、鉛筆なら消すことができる可能性があるから、なのだそうです。



▲常設展示室

みることにしました。

美術館の了解をもらい、2月8日(日)午後1時半頃から40分ほど、常設展示室で看視員さんの椅子に座ってみました。お客様をじっと注視するのではなく、何気なく見つつ、複数のお客様の中で死角が見えないように：と、なかなか大変でも緊張しました。

「いらっしゃいませ」の言葉も看視員さんにつれられて口に出して見ました。「ようこそ」という気持ちと、「どうか作品に触ったりしないでね」という願いも込めつつ！(後半次号に続く)

「高尾由美

美術館 2004年度のラインナップ

【特別展】

ピノッキオの世界展 4.9(金)～5.9(日)

1883年にイタリアで初めて出版された名作童話「ピノッキオの冒険」。その初版本挿絵原画、書籍、人形、19世紀絵画、そして現代作家が描く現代のピノッキオなど、さまざまな角度からピノッキオの世界を紹介。

日本伝統工芸展50年記念展「わざの美」 5.28(金)～6.27(日)

「日本伝統工芸展」は1954年に第1回展が開かれ、今年で50年を迎えます。9000人以上の出品作家の中から特に創造性に優れた150人を厳選して展示します。陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工、人形、その他工芸品等約150点。

アンテスとカチーナ人形—現代ドイツの巨匠とホビ族の精霊たち 7.23(金)～8.29(日)

アンテスは特異な人体表現で知られるドイツの芸術家で、北米のプエブロ・インディアンが祭礼に用いるカチーナ人形のコレクターとしても知られる。アンテスの作品約60点とカチーナ人形約70点により、プリミティブ・アートと現代美術の関係を検証。

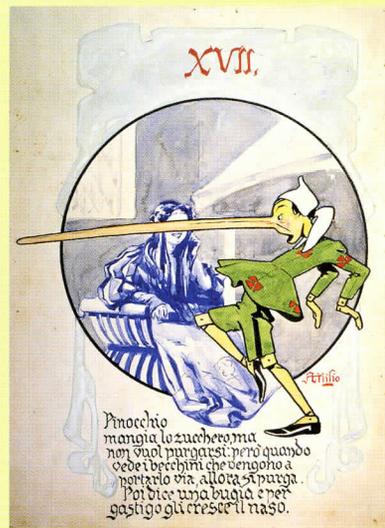
【常設展】

現代美術と工芸

第1期 4.3(土)～5.23(日)

第2期 5.28(金)～8.15(日)

第3期 8.21(土)～10.24(日)



▲アツテリオ・ムッシーノ「カルロ・コロニーディ「ピノッキオの冒険」(1910-11年版)挿絵原画」(1910頃)イタリア、フィレンツェ、ジュンティ出版社、歴史文書室蔵 © Giunti Editore, Firenze, Italy

お問い合わせ

- ◆ボランティア通信「しびの一と」、シヴィのギャラリートークに関するご意見・ご感想
 - ◆本紙記事「知ってっただけ、っ？美術館」で取り上げてほしいもの
 - ◆美術に関する素朴な疑問...etc.
- などがありましたら、郵送・ファックス・美術館内のアンケート等でお知らせください。シヴィの活動および、しびの一との紙面作りの貴重な参考にさせていただきます。

高松市美術館 ボランティア係

〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4 TEL087-823-1711 FAX087-851-7250
高松市美術館ホームページ <http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kyouiku/bunkabu/bijyutu/index.html>
展示会やワークショップの案内など、最新の情報を満載！いちど、のぞいてみてください！

利用案内

【開館時間】

火～金：9時30分～19時
土・日・祝日：9時30分～17時
(展示室の入室はいずれも閉館30分前まで)

【休館日】

月曜日(ただし、休日と重なる場合はその翌日)
年末年始(12月29日～1月3日)

私達と鑑賞をご一緒しませんか？

美術館ボランティア「civi(シヴィ)」によるギャラリートークは特別展会期中の毎日曜日および祝日の午前11時～、午後2時～1日2回、2階展示室にて行います。

作品や作家などの知られざるエピソードが聞けるかも？

編・集・後・記

- 綾川流域の滝宮(綾南町)に昔、智泉大徳という僧がいました。智泉は空海の子でおいにありました。智泉は空海から教えた唐の麵の作り方を覚えて帰る、両親にこそうしたといわれ、そのことから讃岐うどんの発祥の地は滝宮であると伝えられています。美味なる讃岐うどんの歴史を感じながら、うどん巡礼に出かけたい今日この頃です。 [佐々木真理子]
- civiに仲間入りして早一年。お腹いた子どもも5か月となりました。子どもの成長は素晴らしいなあ、と思う毎日です。自分自身も子どもともに成長していきたいです。 [末原香里]
- 平成16年度も「日本伝統工芸展50年記念展「わざの美」」や「ミュージア展」など、目が離せない展覧会がいっぱいですよ。みなさんぜひ美術館にお越しください。 [鈴木典子]
- 看視員と受付のみなさま、取材にご協力くださりありがとうございました。 [高尾由美]
- 伝統工芸品を鑑賞する事により、私たちの生活は伝統の上に成り立っていると改めて気がきました。その様に考えると、毎日使っているお箸もお椀も、みな愛しく大切に思える今日この頃です。 [富岡洋子]
- 漆芸家・北岡省三さんにワークショップでご指導を受けるという貴重な体験をしました。これからのいろいろ素晴らしい出会いを期待しています。 [皆見礼子]
- 舟越桂展の引継ぎで岩手県立美術館に伺った際、美術館の方々にわんこそば対決を開催していただいたところ、他の参加者の疲労(?)が幸いしてか、105杯で見事優勝さきちゃん(娘、7月、2月現在)、ハハはやったよそれにしても、わんこそばは楽しい。オリンピック競技にしてほしいものです。 [高松市美術館学芸員 牧野裕二]
- 上野の西洋美術館での5日間におたる教育普及ワーキンググループの研修会、参加してきました。今回のテーマは「美術館のミッション」。各人の個性や歴史があるように、それぞれの美術館にも、15年前に高松市美術館誕生へと導いた多くの人々の希望、ミッションを見つめることで、こうした希望の積み重なりを振り返ることができました。そして、シヴィの活動がこれらミッションの実現を支えてくれることを改めて感じたのでした。 [高松市美術館学芸員 毛利直子]